

漢法苞徳塾資料	No. H005
区分	資料
タイトル	漢法苞徳会における治療システム（新システム）について
著者	漢法苞徳会
作成日	2005.08.07 夏期合宿（平成 17 年）

1. 従来の治療システム

戦後わが国で確立された経絡治療（システム）は、主として六部定位比較脈法によって証を樹てて、六十九・七十五難の取穴原理に従い治療するというものであった。証は、肺・脾・肝・腎の四つの虚証とし、これを十二正経の虚実にあてて治療するものである。

非常に簡便化したシステムであり、初心者でも比較的取りつきやすい面を持っていた。

しかし、このシステムが始まって50年を経た今、多くの矛盾や問題に立ち塞がれている。その第一は、臨床上の運用として、効力の範囲が限定されることであり、第二は、四つの虚証と十二正経の虚実との間の理論上の関連性が明白でないことである。

また、六部定位脈差診が、果たして変動経を表現しているのかとか、脈診としてどの程度まで客観的判断ができるかどうかなど多くの問題が投げかけられてきている。

最近では、脈状診や四診総合の重要性、また取穴原理の論を拡張すべきことが言われ、証に寒熱の概念などを取り入れ、見直す機運はあるようである。しかし、治療システムの根幹を成す病因の位置付け、すなわち『黄帝内経』における「なぜ病になるのか」の主軸を成している運氣（季節の邪）の概念（六淫）を切り捨てたことが基本的な問題として横たわっている。これにより、本治・標治の概念が『黄帝内経』の概念からかけ離れてしまっている。これがこの治療システムを臨床で運用していく上での多くの問題や限界を示しているものと考えられる。

2. 当会と漢法苞徳塾

当会創始者、八木素萌の言葉を引用しますと、

「『黄帝内経素問』『黄帝内経靈枢』そして『難経』など中国古代医学書は、私にとって宗教書のようなものです。この中には医術だけではなく、養生の仕方や人生観、世界観など全てが含まれています。」

八木素萌は、1923年6月生まれ、1957年ごろから漢法を学びはじめる。1979年東洋鍼灸専門学校を卒業後、脈診を主診断法とする経絡治療派に属して鍼灸の臨床を開始するが、壁にぶつかる。経絡治療家らは、自らの脈診を中国の古典医学書に則っていると主張するが、古典を読むと日本流の脈診とは違っていた。

「先人達を読んだといっても読み過ぎし、読み誤りが山ほどあったのです。」

それから 20 数年、八木素萌は独力で中国の漢代から金、元、明、清代に至る膨大な歴史医学書に取り組んだ。そして、古典の指示に従い、多くの診断法を統合して、病人を診断・治療する鍼灸治療システムを長い苦悶の末に構築した。

この間、漢法苞徳塾を創設し、塾長として、古典が読め、解釈の出来る多くの鍼灸師を養成してきた。本苞徳会は、八木素萌の漢法苞徳塾の精神と教えを継承し、八木素萌が構築した鍼灸治療新システムの発展と普及に貢献するため、八木素萌自ら漢法苞徳塾を解消し、これを継承する組織として構築されたものである。

3. 当会鍼灸治療新システムの概要

本システムは、「歴史に学ぶ鍼灸」としての八木流がもつ、季節の気への豊かな感性を特徴とする鍼灸の治療システムです。

「病気の主な原因は季節毎に変わる気」だと古代中国人たちは考えたのです。体質、ストレスや労倦などの内因があるとき、この季候の変化が外邪となり、発病するという考え方です。

1 年を 2 ヶ月毎に区切ると六つの期となります。即ち、二十四節気を六つに分けた、春・夏・盛夏・長夏・秋・冬の六つの期として季節を考えます。これらの時期を彩るのは、風・熱・暑・湿・燥・寒の六邪（六淫）です。そしてこれらの六邪は中国哲学である五行論の木火土金水の性質を持つのです。人体を流れる経脈も五行の性質を持つことから、すなわち木の性質を持つ肝経から、水の性質を持つ腎経まで、これらの邪気は陰陽十二経脈に対応するのです。

当システムでは、患者さんの変動する経脈やツボ、腹部などを丹念に触診・観察し、治療するツボも五行論的に割り出します。

治療に用いる鍼は、八木素萌自ら考案した金製と銀製の太い大鍼です。これらは多くの場合、二本セットで用いるのですが、これを名付けて「汎用太鍼」とっております。

そして、最も特徴的なのは接触して運用する鍼なのです。刺さずに皮膚に接触させて刺鍼と同等以上の効果を出すことができます。

「要は外邪を取り除くことなのです」

体に痛みや負担をかけずに治療することができるこの汎用太鍼の素晴らしさは、使いこなすほどに大きなものになっていきます。

人は、季節の中で生まれ、季節の中で病気をします。現代人が失ったこの感覚を取り戻し、多くの病に苦しむ人々への助けとなる力になりたいと八木素萌の鍼灸術は求めてきたのです。

4. 古代医学書の中にみる季節（運氣）とからだ

『素問』五藏生成第10の中に、

「診病之始 五決為紀 欲知其始 先建其母……」（診病ノ始メニハ、五決ヲ紀トナス、其ノ始マリヲ知ラント欲セバ、先ズ其ノ母ヲ建テヨ……）があります。この所について、林億・高保衝などの手によるとされる『細字双行』註を見ますと、「五決」というのは、「五臓ノ脈ヲ定メルコト」であり、「先建其母」の母とは「時ニ応ズルノ王氣ナリ」、つまり季節に旺気するものをさしているのです。

そしてさらに続けて「先立旺時王氣而後乃求邪正氣也」（先ズ旺時ノ王氣ヲ立テテ後ニスナワチ邪ト正ノ氣ヲモトムルナリ）と註しています。つまり、先ず其の季節の旺気をはっきりさせた上で、然る後に「邪正之氣」＝邪気と正気の状態なり関係を求むるべきであるというのです。旺気を明らかにすることにより、六淫（邪）・六氣（正気）・六経（三陰三陽）がわかるというのです。病因と反応し、感作している臓と経脈、さらに六淫に感作した時期などを問題にしていることがこの記述からも明らかなのです。

この他にも、「季節の氣」に反応し、あるいは感作している経脈及び臓等の関係や、さらに診察・治療との関係などについて「運氣論的記述」といえるものが多く観られるのです。それは、全体的な記述、部分的な記述を含めていえば、『黄帝内経』八十一篇のうち、約半分を為す四十篇程度に『素問』『靈枢』ともに、運氣論的記述があるのです。これは思いがけず大量なもので、それらの論の中でも六淫の診定に関わる部分と時季の旺気に同調させて治療すべきことを論じている部分が書中に多く散見されることは、大変興味深いものです。

そして、『難経』四難の脈論において、六つの脈状が季節と経脈及び臓に配当されている記述があります。これについては八木素萌も長い間、多くの註解書を見ても今一步わからないという状態が続いておりましたが、近年『薬註難経』が発見されたことにより、問題としていたことが解決できたのです。

即ち、これは、二十四節季を「初之氣」、「二之氣」、「三之氣」、「四之氣」、「五之氣」、「終之氣」という具合に六分して、六経の三陰三陽と対応させているのです。その上、「主之」経脈と臓を明らかにし、夫々の時季の「氣」が「風・熱・暑・湿・燥・寒」であり、その特性は「動・軟・柔・緩・斂・堅」であると論じていることが明白になったのです。これにより、当会の治療システムは大きく前進し、以下に述べる理論と臨床とを組み合わせた治療システムの構築となったのです。表1に、この『薬註難経』に基づいた、運氣参考表を示します。

5. 季節の邪とからだ

私達の体は、好むと好まざるとに関わらず、季節の影響を受けます。これを私達は季節の邪を受けると称します。健康体の人であっても、暑さ、寒さ、風、湿気などに常に曝されているわけですから、なんらかの影響を受けているのです。通常、このような季節の邪は、からだの側に大きな内因を持っていなければ、体に大きな悪影響をすることなく季節は過ぎていきます。

しかし、強いストレスや労倦（疲れ）などを持っていますと、この季節の邪は体の防衛ラインを突破して体内に入ることが往々にしてあるのです。体内に入った邪は溜まった部位の経脈の運行を妨げます。邪の種類や溜まったところにより、症状は異なりますが、なんらかの処置が必要とされる状態となるのです。まだ病という状態ではないこのような時期を未病といい、鍼灸の最も得意とする状態と見なされており（未病治癒）。この時期に適切な処置が出来れば、いとも簡単に症状は消え、鍼灸の即効性に治療家も患者も驚くことがしばしばです。しかし、この時に間違えた治療をしたり、放置したりしますと、邪はからだ深く進行したり、また、経脈の運行が阻害された状況が長く続くためにその部位や上流部分に栄養不足状態などが生じ、からだは次第に複雑な様相を呈して行きます。さらに、病を持つ人などは、もちろん季節の邪を受けやすく、季節ごとに症状が重なることがあり、さらに痰飲や瘀血などの影響もからまり、複雑な様相を呈して行くと考えられます。八木素萌は言います。

「一見複雑に見えても根は一つだよ。『らっきょうの皮むき』治療だよ。」

「先ず、今の邪を取り去り、次に病を起こした邪に対して対処するのだよ。どの経脈をどんな邪が侵しているか、問題はなにか、深さはどこまでいっているか、そして予後はどうかなど、立体的構造で病を解析し、配穴を考え、病を起こしている原因を抜くのだよ。そして、正気の不足している経脈を補してやる必要があるのだ」

と。また、

「決して、補してやろうとして、正気を侵さないことが必要。毫鍼で刺入する場合は特に注意が必要だよ。その点汎用太鍼はうまく使えば患者もラクだし治療も的確にできるね。」

私達は、患者に接するときどのようにからだを診て判断し、治療するでしょうか。

まず、四診（望診・聞診・問診・切診）を行います。

八木素萌の望診、聞診は見事です。声、歩き方、顔つき、死生、皮膚の色、舌の状態などを一見して、病態を判断します。深い知識の積み重ねをベースに季節の運気を重ね合わせて行う望診、聞診に、私達についてはいけないことがしばしばです。それでも先生は望診、聞診を常に訓練していることが傍らにいる私達にもわかります。

望診、聞診はもちろん経験を踏むことが必要です。しかし、それを判断する知識がなければうまく進みません。私達は、望診する上で最低必要な知識を習得することが先ず必要なのです。

次に、問診です。季節の邪によって病が起きているかどうか。あるいは、病態が長く、からだ内部の非生理的物質、たとえば痰、飲、瘀血、あるいは火などによって病態が生じているのかなどを判断しなければなりません。問診は特に発病の時期、これまでの治療経過、病状をよく聞き、病態を出来るだけ正確に知ることが大切です。これも的確に答えを引き出すには、知識と訓練が必要です。そして切診です。これには、脈診、腹診、切経の他に、当システムでは、八虚診および臍傍診を取り入れております。

別表に当システムが運用する診断カルテを示します。

6. 新システムの流れ

①診断カルテの記入

- ・望診・触診チェック図（人体図）
- ・各種弁証表
 - a. 補瀉選択表
 - b. 外感・内傷の診別表
 - c. 虚実弁別表
 - d. 六経弁証表
 - e. 衛気榮血弁証表
 - f. 三焦弁証表
 - g. 表裏弁証表
 - h. 寒熱弁証表

五行的記入欄の診察項目に従って、複数の方向から所見を取る。

その所見は、五行論的に整理され転換されて表に記入される。

この段階での総合的所見が記入されている。平面図が出来たようなものである。

②病解（病のイメージング）

- ・病態的特徴
 - a. 病因（三因と六因）
 - b. 病蔵
 - c. 変動経
 - d. 寒熱
 - e. 虚実
- ・罹患の時期、季節
 - ・これらを確認して、所見相互間の関連性を把握する
 - ・この段階を、立体モデルをイメージする段階という。これは、従来の「証立て」に似ているが、概念は全く異なる。
 - ・カルテの解析「病解」過程から「病のイメージング」の終了までのプロセスをいくつかの段階に区切ることが可能である。
- ・「五行と六経の転換」「多層性および協震性（共鳴）の解析……試案の図」

③治療方針を立てる

- ・用経・用穴と施術手技の決定
- ・変動経絡の認識確認……経絡の触診、運動診
 - 変動経絡の認識が、他の諸所見の意味している所と矛盾なく説明できることが必要

- ・病態的特質に適合した鍼法の選択

病の六変に応ずる刺法の論……『靈枢』邪氣蔵府病形第4

『難経』型の尺皮診と相互に対照して考察する

- ・補瀉の決定

『難経』八十一難の「脈に従うのでなく病そのものの虚実判断に従え」に基づく。

ここで、病の程度問題を「虚・実」と表現すると、混乱を招きやすいので病の「過・不及」という言葉を使う方が施術の程度を選ぶ上でより判りやすいと考える。

④配穴

病因・病臓・変動経及び運氣的なものを考慮しつつ

「七十四難」の原理を軸に、「六十八難」「六十九難」「七十五難」などを運用する。

⑤治療

- ・治療する時点での時邪を取る

「病因論を多角的に検討すれば」(2002.04.29)

- ・病を起こしている邪を取る……精気の有無

発症の時期、病邪の位置(経絡、経筋、臓腑)

- ・病態の精気を知る……脈状診に相当

「尺皮診」……六変刺(三陰三陽に病が在る場合の尺皮の変化)

- ・灸

「灸治療概論」(改-001)

このシステムは、

- ①脈診が不得手であっても、効果的に経絡を運用する経絡的治療は可能であるように、多方面からの診断要素を採用している。
- ②再現性を重んじ、主観的な思い込みに陥る危険性を避けるように配慮工夫した方式である。
- ③システム全体を臨床見学者も、臨床記録を見る人達にも見えやすく判りやすくなるように工夫した。また術者がこれらを第三者に説明できる方式を工夫した。
- ④初歩的な基本知識と技術があれば、比較的容易に習得でき、新人から熟練者までシステム全体を共有でき、臨床判断の基本も共有できるよう工夫した。

II. 個別編

1. 中風
2. 月経
3. 咳
- 4.

表 1. 運氣取穴参考表

2003.9.25

気数 月度	節気 主之	時気と特性	十二支	脈状	蔵府と経絡	六淫
初之気 1月～2月	大寒～春分 厥陰風木	風 動	丑寅卯	左関：沈滑而長 一陰二陽	肝・足厥陰 胆・足少陽	風・温 相火(暑) ●
湯液 平肝清火(小柴胡湯=足少陽薬)熱病行於下 風病行於上 風燥勝復形於中等 鍼灸 春一刺井穴一邪在肝(74難) 達鍼一大敦(儒門事親) 春一病在肝一頭一筋一俞在頸項 ※母穴：曲泉 子穴：行間 侮穴：太衝 畏穴：中封 自穴：大敦						
二之気 3月～4月	春分～小滿 少陰君火	熱 軟	卯辰巳	左寸：浮滑而長時一沈 一陰三陽	心・手少陰 小腸・手太陽	熱・君火 ● 熱・(火) ●
湯液 降火潤肺(麦門冬湯=手太陰・足陽明薬)熱病生於上 清病生於下 寒熱凌犯而争於中 民病欬喘 血溢等 鍼灸 夏一刺榮穴一邪在心(74難) 疎散一少衝(儒門事親) 夏一病在心一病五蔵一脈一俞在胸脇 ※母穴：少衝 子穴：神門 侮穴：靈道 畏穴：少海 自穴：少府・勞宮						
三之気 5月～6月	小滿～大暑 少陽相火	暑 柔	巳午未	右尺：浮而瀦 一陽一陰	三焦・手少陽 心包・手厥陰	暑(相火) ● 暑熱・相火 ●
湯液 清火降逆和解(小柴胡湯=足少陽薬) 瘡瘍・寒熱・瘧・泄・聾・暝・嘔吐等 鍼灸 相火=原穴/関衝・中衝に対応す(八木) ※母穴：関衝 子穴：中渚 侮穴：支溝 畏穴：天井 自穴：陽池・液門						
四之気 7月～8月	大暑～秋分 太陰湿土	湿 緩	未申酉	右関：長而沈瀦 一陽二陰	脾・足太陰 胃・足陽明	湿・湿土 湿・燥土
湯液 温中通陽利湿(桂枝人参湯=足太陽薬) 寒湿・腹滿・身臃憤・附腫・痞逆・寒厥・拘急等 鍼灸 季夏一刺俞穴一邪在脾(74難) 奪鍼一隱白(儒門事親) 長夏一病在脾一舌本一肉一俞在脊 ※母穴：大都 子穴：商丘 侮穴：陰陵泉 畏穴：隱白 自穴：太白						
五之気 9月～10月	秋分～小雪 陽明燥金▲	燥 斂	酉戌亥	右寸：沈瀦而短時一浮 一陽三陰	大腸・手陽明 肺・手太陰	燥・燥金 ★ 燥・清金 ★
湯液 潤燥育陰利水(猪苓湯=足太陽・陽明薬) 咳・噎塞・寒熱發暴・振深癰悶等 鍼灸 秋一刺經穴一邪在肺(74難) 清鍼一少商(儒門事親) 秋一病在肺一肩背一皮毛一俞在肩背 ※母穴：三間 子穴：曲池 侮穴：商陽 畏穴：二間 自穴：陽谿・合谷						
終之気 11月～12月	小雪～大寒 太陽寒水▼	寒 堅	亥子丑	左尺：沈而滑 一陰一陽	膀胱・足太陽 腎・足少陰	寒・寒水 ★ 寒・水陰 ★
湯液 温中燥湿(理中湯=足太陰薬) 寒湿・発肌肉痠・足痠不収・濡瀉血溢等 鍼灸 冬一刺合穴一邪在腎(74難) 折鍼一湧泉(儒門事親) 冬一病在腎一四肢一谿一骨一俞在腰股 ※母穴：崑崙 子穴：至陰 侮穴：通谷 畏穴：束骨 自穴：委中・京骨						

漢法苞徳会カルテ

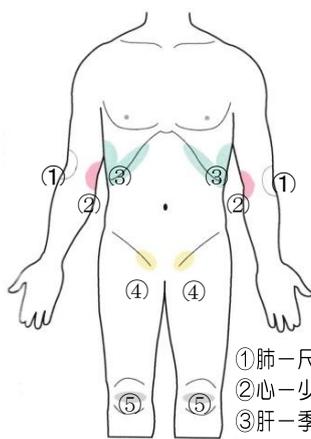
カルテNo.

ふりがな 氏名	男	生年月日(大正・昭和・平成・)
	女	年 月 日 (歳)
住所 〒		
主訴・現病歴		
既往症		

診察チェック表(変動所見がある該当部分には○印を記入)

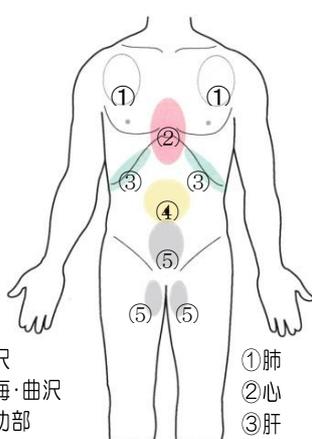
三因弁別	内因		外因		不内外因	背候診	一般	木	火	土	金	水
病 因	風	熱	湿	燥	寒		腧穴	木	火	土	金	水
八虚診	木	火	土	金	水	顔	色	▽	△	□	◇	○
	左右	左右	左右	左右	左右			青	赤	黄	白	黒
尺皮診	急	数	緩	濇	滑	脈	弦	鈎	代	濇	石	病理的産生物の 反応
	左右	左右	左右	左右	左右							
腹診	難経型	木	火	土	金	水	飲	中庭 上脘 豊隆				
	塾一般	木	火	土	金	水	痧	下委陽 痞根(命托)				
	臍傍診	木	火	土	金	水	風の反応		風市 中瀆 陽関 期門			
	募穴診	木	火	土	金	水	火の反応	二便				

1 八虚診



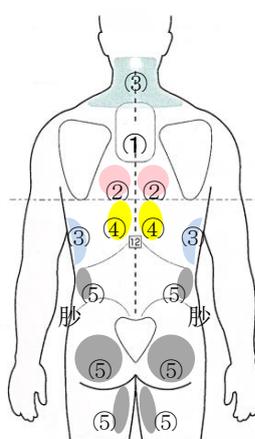
- ①肺—尺沢
- ②心—少海・曲沢
- ③肝—季肋部
- ④脾—鼠蹊部
- ⑤腎—膝裏(委中)

2 腹診(塾一般)



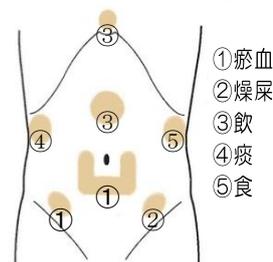
- ①肺
- ②心
- ③肝
- ④脾
- ⑤腎

3 背候診



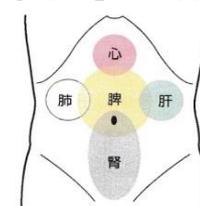
- ①肺
- ②心
- ③肝
- ④脾
- ⑤腎

4 痰・飲・食滯・痧の診



- ①瘀血
- ②燥屎
- ③飲
- ④痰食
- ⑤食

5 『難経』五藏腹診



- ①肺
- ②心
- ③肝
- ④脾
- ⑤腎

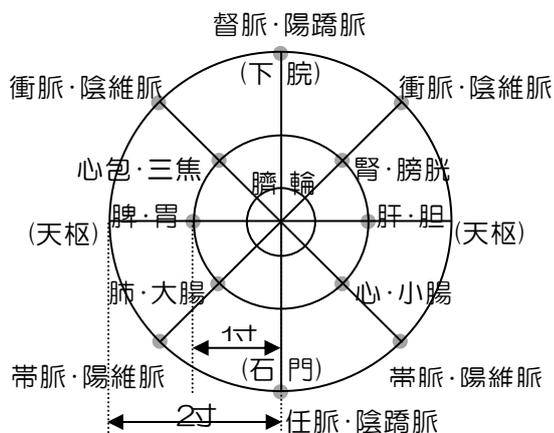
初診時所見

施術
鍼
補+
瀉-
通土
刺絡→
灸△
指導

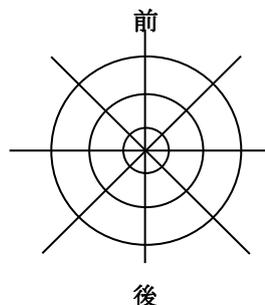
考察

6 臍傍診

7 閉目起立反射



外邪—揺れが大きい—陽	『素問』調經論篇第 62
内因—揺れが小さい—陰	『難経』37 難
寒—ちぢこまる	『素問』拳痛論篇第 39
熱—ゆるむ	『素問』痺論篇第 43



8 舌診

舌	質	薄					厚
	色	淡					晦暗
	裏血脈	細					怒
	裏色	淡					晦暗
舌苔	形状 a	粗					濃
	形状 b	無					膩
	色	淡					晦暗
唾液	量	少					多
	粘度	稀					稠

9 運氣参考表

六 氣	節 氣	主 之	十 二 支	脈 (張 元 素)	時 氣 と そ の 特 性	
初之氣	大寒～春分 (大寒 立春 雨水 啓蟄)	厥陰風木	丑～卯	左関：沈滑而長	風	動
二之氣	春分～小滿 (春分 清明 穀雨 立夏)	少陰君火	卯～巳	左寸：浮滑而長時一沈	熱	軟
三之氣	小滿～大暑 (小滿 芒種 夏至 小暑)	少陽相火	巳～未	右尺：浮而濇	暑	柔
四之氣	大暑～秋分 (大暑 立秋 処暑 白露)	太陰湿土	未～酉	右関：長而沈濇	湿	緩
五之氣	秋分～小雪 (秋分 寒露 霜降 立冬)	陽明燥金	酉～亥	右寸：沈濇而短時一浮	燥	斂
終之氣	小雪～大寒 (小雪 大雪 冬至 小寒)	太陽寒水	亥～丑	左尺：沈而滑	寒	堅

10 病位

六経判断	太陽	陽明	少陽	太陰	少陰	厥陰
------	----	----	----	----	----	----